此帖源氏十七歳の夏より初冬に至る

源氏君訪大貳乳母病

半蔀○半蔀は下の方を板にし上の方を格子にして上に引擧けて開く

第四帖　夕顔

源氏ノ君は。六條邊の御微行の頃。内裡より退出て玉ふ中宿に。大貳ノ乳母の甚く煩ひて。尼に成りたれば。これを訪はんと。ふと思し立て。五條邊の家に尋ね來玉へり。御車引入るべき門は。皆鎖籠たれば。御供の人して。惟光を召さす間。外に待たせ玉ひて。見苦しげふる大路の有樣を。見渡し玉へるに。此家の傍に。檜垣を新しく作爲して。上は半蔀四五間ばかり開け渡して。簾もいと白く涼しげふるに。其處より女の額つきの。透影あまた見えて。外を覗くさまあり。其女どもの物見んとて。立騒ぐ人影の下の方を想像るに。其人々どもの餘り丈高き心地し玉へば。如何ふ

ものなり

何處ゝ指して○古今集に、世中はいつこゝさして我ならん、もきとまるをゞ宿とさたむる」遠方人に云々○古今集

る物の集るゝらん。と奇怪しく思さる。さて源氏は。御車も甚く手輕に爲玉ひて。前駈も召し玉はざれば。君は我を誰とも知るものあらじ。とて打解けて車より差覗き玉へれば。門は蓬の如きものを押開けて。外より見入れたる所も。奥深くもあらぬ。物果かさ住居ふれば。何處か指して。さて玉臺も同し事と。いと哀に思さる。牆の板めくものに。いと青やかなる葛の。快げに蔓ひ懸りて。白き花の。己獨得顔に咲きたれば。君は。

（源）遠方人に物申す。

と獨言し玉ふを。隨身の者。御前に跪きて。

（隨）かの白く咲けるは。夕顔と申し候ふ。花の名は人めきて。かく奇